

版). 同 52 年 (1977) はメキシコ (ポポカテペドル山など)・グランドキャニオンへ. 同 53 年 (1978) 南アメリカ南端のフェゴ島からパタゴニア・アコンカグア山・リマ・マチュピチュなど南米縦断を遂げ, イースター島へも. (この年 71 歳, 勲 3 等に叙せられた). 同 54 年 (1979) にはネパール (チベット国境まで)・台湾へ. 同 55 年 (1980) にはインドネシア (バリ島・ジャワ島)・アラスカ・アリュージェン (50 年ぶりのウナラスカ島) へ. 同 56 年 (1981) には台湾・ヨーロッパ各地へ. 同 57 年 (1982) にも台湾へ. (菌学会名誉会員になる. 各虫夏草の研究が完了). 同 58 年 (1983) 夏ヨーロッパ各地, 冬台湾蘭礁島へ. (「日本・中国菌類歴史と民俗学」, 「冬虫夏

草図譜」出版). 同 59 年 (1984) 冬台湾へ. (「続分裂子」, 「世界の顕微鏡の歴史」出版). 同 60 年 (1985) 上海・武漢・北京へ. 同 61 年 (1986) 台湾へ. 同 62 年 (1987) (「北極より南極まで——世界の山々と島々の紀行」を出版).

平成 5 年 (1993) 随筆「筆のすさび」これは生前書き遺された原稿を遺族の方が編集されたもの.

以上小林氏が 50 数年にわたって踏破し調査研究した地域は, 極地から熱帯まで 5 大陸すべてに及んでいる. 私は到底彼には適わない. 敬服するばかりである.

Dr. Yosio KOBAYASI, a member of the editorial board of the Journal, has passed away on January 6th, 1993 at the age of 87. (伊藤 洋)

新刊

□小田好道: 山県草木志 末田 尚 解題・翻刻. 安藤久次 植物解説. 広島市立中央図書館編集. A4 版. 299pp. 1992., 広島県山県郡の医者であり博物学者であった小野好道が, 安永 2 年 (1780) に執筆して広島藩に献上したもので, 市立中央図書館の浅野文庫に保管されている. それを翻刻し考定して出版したのが本書である. 原本の写真版とその翻刻が載せられ, そこに記されている 445 種の植物が解説されている. 好道は独学で医学を勉強したと言う. 当然草木学の知識が必要となるが, 本草綱目啓蒙, 大和本草などをもとにして, 山県地方の植物を調べたのである. 薬用や食用などに関係するものが殆どであるが, 実際に自分で見聞し, また地元の人に聞いた事実を記しているのが特色である. また参考した本の誤りも指摘している. それがたくまげして地方の植物誌を作ることになっている. 江戸時代には各地にこのような研究者がいたのであろうと推測される. 埋もれていたその一端を明らかにしてくれたことは, 博物学の歴史の上でも貴重なものと思う. 地方の熱心な研究家が実地の検証から学問に寄与してくれていることは, 現在でも同じであるが, 江戸時代での事例を示してくれた. 本書の出版, 解説された, 故末田氏, 安藤氏, 広島市立図書館の方々の努力を多とする次第である. (山崎 敬)

□Lone F.A., Khan M. and Buth G.M.: *Palaeoethnobotany. Plants and Ancient Man in Kashmir*. 1993. 278 pp. A. A. Balkema, Rotterdam. ¥10,450.

カシミールの古代遺跡のうち, Burzahom と Semthan から得られた植物遺体の同定と, それらによる古植物環境の推論である. 年代は Burzahom では 2375 BC から 200 AD, Semthan では 1500 BC から 1000 AD にわたる. 2/3 以上のページを費やして, 同定形質の説明と得られた植物のリストおよびそれぞれについてのコメントが述べられている. 植物遺体は種子と材 (炭化物を含む) で, 主として形態と計測数値により特徴区分がされている. SEM 写真も多数示されているが, 紙質が合わないため不鮮明なのが惜しい. 古代のカシミールで利用されていた植物は, 木材や飼料植物のほか *Juglans regia* などは現地産であるが, 多くの有用植物は三つのルートもたらされたとしている. 西アジアのハラッパ文明からはオオムギ, コムギ, エンドウ, レンズマメ; 中央アジアからはアメンドウ, モモ, セイヨウアンズ, スズカケノキ, カラグワそれにおそらくキビ, ブドウが導入され; パンジャブや西北ヒマラヤはコメ, ツゲ, イチジク類がもたらされたとする. 種類の同定のみでなくその産出量から, それぞれの時代の農業形態の推定も行われている. その裏付けとして,

χ^2 乗検定をはじめ種々の推計的手法がとられている。
(金井弘夫)

□土橋 豊：観葉植物 1000 279 pp. 1992. 八坂書房. ¥5,800 (+送料).

園芸界では国際的な流通拡大と品種改良技術の進歩が著しい。数年前に出版された名鑑や図録などでは見いだせぬ商品がごく普通に市場に見られることもざらである。

本書は現在市場に出回っている 1, 000 種類(種ではない)の観葉植物をカラー写真で紹介し、特徴、栽培法などを簡素に述べたものである。著者は京都府立植物園に勤務する。

この類の著書では、まずどの程度世界各地の植物を正しく同定しているかが、われわれの関心を引く。この点では、画期的な小学館版「園芸植物大事典」があるとはいえ、正しい学名や園芸品種名を決めることは並み大抵のことではない。本書は索引とともに、同定に相当な努力を払ったと思われる。私の気づく範囲では明かな誤りは見出せなかった。

103のカラー図版は眺めるだけでも楽しい。解説は手ごろな入門書でもある。
(大場秀章)

□川崎哲也(解説), 奥田 寛, 木原 浩(写真): 日本の桜 383pp. 1993. 山と溪谷社 ¥4,900.

山溪セレクションのひとつとして出版された、日本のサクラの写真による図鑑といってよい。各地の栽植品のほか、野生品についてたくさんの写真が収載され、眺めているだけでも楽しい。

しかし、何といっても出色なのは川崎哲也氏による解説である。植物画家としても定評のある川崎氏の解説は種のみならず栽培品種の特徴をもよく捉えている。各種、栽培品種には和名と学名が表記され、巻末の「サクラ系統別一覧」にそれらがまとめられている。本書で用いた 42 の新学名一覧も載せる。

日本のサクラは野生種とも栽培品種とも高い変異性を示している。これらを保全することは、種の保全上大切なことである。本書では数多くの雑種が推定されているが、その機構には立ち入って検討されていない。

これは蛇足だが、野生種についての雑種という表現は、そろそろさらに深く立入って検討されるべきである。

イシヅチザクラ、ヤブザクラの学名に、雑種を示す記号、×が附されている。ここでは理由は省くが、私はこれらの‘雑種由来’のサクラには×は不要と考える。

これまで山と溪谷社の出版物には学術的側面に難がみられたが、本書は実にすばらしい。

(大場秀章)

□中池敏之・Malik S.(編): Cryptogamic Flora of Pakistan Vol. 1. 316 pp. 1992. 国立科学博物館(東京)・パキスタン自然史博物館(イスラマバード).

パキスタンはインドの西側にある国で、南のアラビア海の 0 m から、北の 8600 m を越す雪の山まで、地形も気候も変化に富んでいるので、植物の種類も多いと言われている。1990年の8月上旬から9月下旬にかけて、文部省の国際学術研究費による日本・パキスタン合同の隠花植物の調査研究が実施された。日本側は中池隊長以下 8 名、パキスタン側は Sheikh, B. A. 議長およびマリク指導者以下 10 名の隊員から成る大部隊が、パキスタン各地で採集・同定を行なった。採集した標本は日本の国立科学博物館とパキスタンの自然史博物館に保存されている。この報告書には 24 氏の研究になる 17 編の論文が載っている。内訳は藻類 4 編: 海産藻類目録, ラン藻類, マングローブ林内の大型藻類, 菌類 10 編: 粘菌類, サルノコシカケ類, 担子菌類, 腹菌類, サビ菌類, 蘚苔類 2 編: ハイゴケ類の染色体数, セン類目録, シダ植物 1 編: 目録(これには 68 種類の脂葉写真が付いている)。
(伊藤 洋)

□中池敏之: 新日本植物誌 シダ篇 改訂増補版 B5判 868 pp. 1992年11月, 至文堂, 東京. ¥25,000(税込).

初版は 1982 年に出たので、10年ぶりの新版ということになる(旧版は本誌 57: 211 に紹介した)。この間シダ学の進展は著しく、著者も含めた内外研究者の論文が次々と登場した。今回の新